

基幹病院レベルと同程度以上の専門医療を目指す

患者に寄り添い地域に貢献するクリニック



患者さんの想いを聴き応えるテーラーメイドの治療を心掛け、
最適な治療をお勧めしています

たいや内科クリニック

院長 加藤 大也

「向上心、努力、驚き」を花言葉にもつ、つくし。そして、つくしが成長して茂るスギナ。これらを組み合わせた可愛らしいロゴを掲げるのが、愛知県豊田市にある「たいや内科クリニック」だ。
このロゴに「人と人が繋がって、協力し合い、関わる全ての人々がたくましく伸びやかに成長できる医院でありたい」という想いを込めて同院を開業したのが、糖尿病、甲状腺の専門医である加藤大也院長。
糖尿病は合併症が悪化すれば足の切断や、失明も考えられる病だが、未だその認識は少ない。加藤院長が注力する糖尿病の早期治療の啓蒙や日々の診療、信頼を置くスタッフなどについて、様々なお話を伺った。

「人の役に立ちたい」と医療の道へ 重篤な糖尿病患者と、その家族の姿から糖尿病の早期治療の啓蒙を決意する

両親を始め親族に薬剤師が多く、医療が身近な環境で育った加藤院長。実家は名古屋にある個人薬局で、薬を求められたら夜でも店を開け、高齢者の家まで薬を届けるなど親身な姿勢で薬を提供していた。そんな環境もあり、加藤院長は自然と「人の役に立ちたい」、「医師になりたい」という想いを募らせていく。

現在の藤田医科大学医学部へ進学し医師免許を取得、2003年には内分泌・代謝内科へ入局した。専門に糖尿病を選んだのは「患者さんの人生に長く寄り添える、生活習慣病などの慢性疾患の治療が私と合っている。自分より年上と接する機会が多く、人生の先輩として色々教わりながら共に歩めるのも魅力だ」と考えたため。また加藤院長は、食生活の欧米化により糖尿病が増加していく気配も感じていた。

2005年には愛知県豊田市にある現在のJA愛知厚生連豊田厚生病院へ入職。17年間研鑽を積み、内科外来の新規増築の際には、診察室、栄養相談室、フットケア室等、1カ所で効率性、採算性、専門性を追求した糖尿病チーム医療が完結する診察環境を病院に提言し、作り上げた。

豊田厚生病院では、足を切断しなければいけないような糖尿病合併症が進んだ患者も数多く担当。病状を



説明された患者家族が泣き崩れることもあり、加藤院長は何度も「もう少し早く治療介入をすれば防げたのでは」と考えさせられた。

基幹病院へ紹介で来院する糖尿病患者に合併症が進んだ患者が多いのは「病院に行かない患者さんが多いため」だと加藤院長。2型糖尿病は生活習慣から患うため、罪悪感から通院を避ける者もいる。また、独り暮らしの患者は健康に対する意識が低く、職場から促されても検査をしない者もいるという。

「結果として治療が後手に回り、病状が悪化し、その現状に涙する方も多くいました。これも、糖尿病についての認識不足が原因です」

その想いを強くした加藤院長は2022年、糖尿病の早期治療の啓蒙を決意し、たいや内科クリニックを開院する。

妊婦から外国人まで様々な患者が訪れるたいや内科クリニック 高度先進医療のインスリンポンプ治療をクリニックの外来で

糖尿病、生活習慣病、甲状腺疾患を診療の柱とする同院。患者の年齢層は20〜70代、性別では女性の割合が高い。

また、近隣の団地には約4000人のブラジル人が在留しており、同院へ通うブラジル人患者も多い。加藤院長は、通訳やポルトガル語の資料を用意した万全の体制を敷いている。

「生活習慣病は本音を聞けなければ治療が難しい病。翻訳ツールで通訳も出来ませんが、より深いニュアンスの違いを理解し、患者さんに安心感を与えるには、生身の通訳の力が必要です」

同院の糖尿病治療で最も特徴的なのはインスリンポンプ療法だろう。インスリンポンプは皮下に留置した

細く柔らかいカニューレを通し、持続的に少量のインスリンを注入。食後はボタン1つで患者自らインスリンを注入することもできる。従来の食事毎にインスリンを注射する方法と比べて、負担感が少ない血糖値管理で、正常に働く膵臓に近いインスリンの働きが期待できる。

インスリンポンプの多くは、基幹病院などに入院して導入する高度先進医療。クリニックの外来で導入が行えるのは、同院に優秀なスタッフが多く在籍し、チーム医療が完成しているからだ。

このようにインスリンポンプは有用な治療方法だが、誰にでも勧めるわけではない。インスリンポンプは、特に高い医療費が必要で、3割負担でも月に数万円程と高額。無理なく糖尿病の治療を続けるためには、患者の状態、生活背景を考慮し、患者に合った最適な治療法を採る必要がある。

同院では「患者さんの想いを聴き応える、テーラーメイドの治療を心掛けており、患者さんの状態だけでなく生活背景も考えて最適な治療をお勧めしています」と加藤院長。生活まで気遣うその姿勢が患者を救っている。

糖尿病の治療を院内で完結できるよう用意した多岐にわたる設備 患者が更に快適に検査を受けられるよう先進機器の導入を進める

加藤院長は基幹病院と同じ体制でチーム医療を提供できるよう、同院の構造を豊田厚生病院を意識した診療環境にしている。

クリニックでは珍しい多目的室では、糖尿病教室「つくしの会」の開催や講演会、1型糖尿病ミーティングなど、糖尿病末期患者をゼロにするための様々な啓蒙活動を行う。また、発熱患者の隔離、運動療法など様々な用途で便利に活用されている。



キッチンでは管理栄養士を中心に、店頭に並ぶ一般的な野菜よりも栄養価が高い有機野菜や、季節の食材を使った料理教室などを開催。ブラジル人患者と共にブラジル風の和食を作るなどの取り組みも行っている。「医食同源」と言うように食事と医療の関係は深い。特に糖尿病において「食」は、大切な要素であり、学ぶ機会は重要だ。



糖尿病において重要な「食」を料理教室で学ぶことができる

フットケア室では糖尿病で重要な足のケアを行う。患者が深爪や巻き爪、たこなどに自己流で対応した場合、感染し壊疽が出てしまうことも。そのため、特殊な講習を受けた看護師が指導や足のケアを行っている。

検査機器は基本的なものに加え、筋肉量が測定できる体成分分析装置も導入している。特に高齢者は筋肉量の減少が続くと寝たきりになる場合もあるため、計測結果によってはタンパク質を摂取するよう管理栄養士が栄養指導などを行う。また、糖尿病の代表的な合併症に網膜症があるため、同院では、AIが診断する眼底検査も実施している。合併症の検査まで院内で完結しようとする加藤院長のこだわりが見える。

加えて、エコー検査を行える臨床検査技師も常駐。内科の患者を受け入れ、エコー検査や採血等で即刻診断。必要ならば基幹病院へ救急搬送している。

今後は、さらに基幹病院並みの検査機器を導入する予定だという。現在の機器も優秀だが、加藤院長は「より高度な検

査機器の導入は、検査の当日に結果を出し、そのリアルタイムの検査結果で適正に患者さんにアプローチを行う」ために決断した。

決断の背景としては、基幹病院の事務長経験者が事務長として入職したことも大きい。加藤院長は「メディカルスタッフも20人を超えました。そのスタッフの業務管理や、医療機器の業者との折衝等でもとても助かっています」と語る。

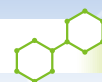
スタッフ、治療、検査、全てにおいて最先端の医療を目指している同院。加藤院長は「最高のシステムを作り、地域の患者さんの健康を守るのが私の仕事。スタッフの協力のお陰で、基本的な診療から糖尿病合併症の予防や命に関わる救急疾患の発見まで、全身に関わる医療体制を提供できています」と謙虚に、しかし力強く語った。

加藤院長が太鼓判を押す優秀で向上心溢れるスタッフたち スタッフのやりがいを引き出し、夢を叶える

国の方針で、基幹病院では救急医療やがん治療が中心となり、慢性疾患への注力が難しいケースが多くなってきている。そのため基幹病院では、慢性疾患の治療をサポートする専門資格を取得したメディカルスタッフが、別の診療科へ回され、専門資格を活かせない場合が多く、仕事にやりがいを失うこともあるという。

同院では、経験豊富なメディカルスタッフ（看護師、管理栄養士、臨床検査技師・糖尿病看護認定看護師1名・日本糖尿病療養指導士5名・愛知県糖尿病療養指導士5名）が在籍し、それぞれ専門スキルを活かし、患者をサポートしている。

加藤院長は「資格を活かせる環境作りも当院のコンセプトの1つ。お金と労力を費やして取った資格を活



働きやすい環境作りを重視し、ホワイト企業認定シルバーを取得

かせる環境を作ることで、スタッフがやりがいを持ち、働く楽しさを実感して欲しいと思います」と力強く語った。

また、医師に代わってカルテを記載するシュライバーがいるのも同院の特徴だろう。

加藤院長は「データを見ながら診断することも大切ですが、患者さんをしつかり診て全身状態を察し、最も良いアプローチを考えることも大切です」と語る。シュライバーの存在によって、より患者の様子をつぶさに観察することができているのだ。

そんな頼りになるスタッフたちの満足度を高めるため、働きやすい職場環境作りを重視する加藤院長。スタッフの家族も招いたバーベキュー大会やビンゴ大会などを開催。他にも、スタッフ全員と面談を行い、「専門スキルの発表の場が欲しい」、「安心して子育てや介護を両立できる職場で働きたい」といった各々の希望を実現できるよう手を尽くしている。

この実績から、ホワイト企業認定シルバーを取得した。ホワイト企業認定とは、家族に入社を勧めたい、次世代に残してい

きたい企業を認定する国内唯一の認定制度を持つ組織。
この認定を取得できたのは、ひとえに「スタッフの夢を叶えたい」という想いから加藤院長が行動し続けている結果である。

「医療のプロフェッショナルとして、常に向上心を持ち、知識と技術を絶えず鍛錬し、患者さんの安心と幸せを届けること」を目標とする同院。「スタッフたちはその目標に相応しく私が知らないところで勉強会

を開くほど、自主性と責任感、そしてプライドを持って取り組んでくれています」と、加藤院長は尊敬の眼差しで語った。

数十年かけて優しく糖尿病患者に寄り添う 100年以上続くクリニックを目指して

糖尿病は自らの生活管理のせいで患うという、マイナスイメージが強い。

「糖尿病は罪悪感を抱きやすく、患者さんは勇気を振り絞って来院されます。来院時に『クリニックに頑張つてよく来たね』と褒めてあげると、みるみるうちに顔色も顔つきも良くなっていくのです」

また、前回の来院から長期間空いたとしても、加藤院長は「人間関係で落ち込んだり、経済的な事情で通えなかつたりなど、患者さんそれぞれの事情があるでしょう。そのため、来院してくれたことに感謝して、患者さんと寄り添い、常に通院のハードルを下げることを大切にしています」と患者を慮った。

加えて、東海3県の小児1型糖尿病患者を対象にした糖尿病サマーカーンプにも同院のメディカルスタッフと共にボランティアスタッフとして18年以上参加を続けている。孤独感が多い1型糖尿病患者にとって、同じ病気を持つ仲間と過ごすサマーカーンプは貴重な経験、かけがえのない機会になるという。また患者だけでなく、現状に不安を感じている小児1型糖尿病患者を持つ患者家族を集めての、1型糖尿病患者会も近隣クリニックと合同開催。

「同じ境遇を持つ参加者が会って話すと、共感して涙されることも。情報を共有し、お互いに心を慰める時間は大切なものになるはずですよ」

加藤院長は糖尿病に限らず、未来の医療を発展させるため、クリニックにスタッフの家族を招き、子ども



PROFILE

加藤 大也 (かとう・たいや)

1989年3月、私立東海高等学校卒業。
 1997年3月、藤田保健衛生大学(現 藤田医科大学)医学部卒業。
 1997年4月、医師免許取得。
 2003年3月、藤田保健衛生大学(現 藤田医科大学)大学院医学研究科 内分泌・代謝内科学 修了。
 2003年4月、藤田保健衛生大学(現 藤田医科大学)医学部 内分泌・代謝内科 助手。
 2005年4月、JA 愛知厚生連加茂病院(現 JA 愛知厚生連豊田厚生病院)内分泌代謝科医長。
 2010年5月、JA 愛知厚生連豊田厚生病院 内分泌・代謝内科病棟部長。
 2022年5月、たいや内科クリニック院長。

資格・所属

学位(医学博士)取得(2003年)、日本糖尿病学会認定 糖尿病専門医・糖尿病研修指導医、日本甲状腺学会認定 甲状腺専門医、日本内科学会認定 総合内科専門医、日本医師会認定 産業医、藤田医科大学医学部客員講師、愛知県糖尿病療養指導士認定機構幹事、東海地区小児糖尿病サマーキャンプ研究会世話人。

INFORMATION

たいや内科クリニック



URL <https://taiya-naika.com/>

所在地	〒471-0052 愛知県豊田市逢妻町2-18-4 TEL 050-3172-9573 駐車場(68台)・駐輪場完備
アクセス	とよたおいでんバス21 保見・豊田線「逢妻町」停留所より徒歩2分、 「伊保原団地口」停留所より徒歩3分
設立	2022年5月
診療内容	糖尿病、生活習慣病・脂質代謝内科、甲状腺疾患、一般内科、予防接種・健康診断、糖尿病教室
診療時間	<月・火・木・金> 9:00~12:00、15:00~18:00 <水・土> 9:00~12:00 <休診日> 日・祝
理念	・人と人の繋がりを大切に、関わる人すべてに安心と幸せを届けること ・患者さんの想いを聴き・応え、患者さん目線でテラーメイドの医療を届けること ・医療のプロフェッショナルとして、常に向上心を持ち、知識と技術を絶えず鍛錬し、患者さんに安心と幸せを届けること



子どもが医師や看護師などを体験できる医療体験会を開催

の医療を切り拓き、患者やスタッフたちを導いていく。
 つくしのように親しみやすく、どこまでも伸び続ける向上心をもった加藤院長。その伸びやかな姿が明日

が医師や看護師、薬剤師などの役割を体験する医療体験会を開催。この取り組みは将来的に、スタッフの家族だけに留まらず体験イベントとして広く実施することを視野に入れている。

体験会は無償の奉仕だが、加藤院長は「私は、皆さんが喜んでいる姿が見たいから実施しています。それにこの活動がいつか巡り巡って、たいや内科クリニックに幸せを運んでくれるかもしれませんから」とはにかんだ。

今後の展望としては、「短期目標は、患者さんの待ち時間の短縮や高度医療機器の導入。長期目標としては、100年以上続くクリニックを目指したい」と加藤院長。

「患者さんから、『この街ですつと愛されるクリニックを目指して頑張ってください』というお言葉をいただきました。たいや内科クリニックの風土を構築し、自分1代だけでなくその風土を、未来に継承して行きたい。また次世代に継承するためのシステムや共感を得られる人材を探し、未来に残せるよう考えて行きたいです」